

鶴舞つるまひ下くだり千歳ちとせを契ちぎる。

二 月つきなくて如何いかで木草きくさの茂しげらんや

天津光あまつひかりの影かげのみにして。

三 又またしても月つきの神かみのみ讚ほめ稱たへ

焦こがれ顔がほなる夕暮ゆふぐれの空そら。

四 金龍きんりゅうの池いけの面おもてに澄すむ月つきは

世よの亂みだれをも知しらず顔がほなる。

五 水鳥みづとりのいと安やすらげく浮うかぶとも

足あしにひまなき月つきの御心みこころ。

六 神思かみおもふ珍うつくの心こころにつながれて

あこがれ出いきぬ糸いとのまにく。

七 君きみ知るや高天原たかまほらの神かみの園そのに

身みはよそながらかゝる心こころを。

八 神垣かみかきの月つきの光ひかりをながめつゝ

したゝる雫しづに露うるほひにけり。

九 神垣かみかきの松まつの落葉おちばをかきよせて

常夜とこよの暗やみの篝火かきびをせむ。

十 大丈夫ますらをの中なかに淋しみしく只一人ただひとり

交まじこる我身わがみも神國かみくにのため。

第四九五

一 千早振神の教にしたがひて

御國に盡す外なかりけり。

二 楠船ののり越す波のいや深く

孫ころひとつに御國に盡さむ。

三 花の色は昔ながらに變らねど

移ろひにけり心の花は。

四 木下蔭に淋しげに咲きし此花も

天津光をうけて榮ゆる。

五 空敞し醜の古木の倒れてゆ

白梅の花は世に出でにけり。

六 山深み日影もさゝぬ谷の底に

薫る櫻も月の恵ぞ。

七 花は散り木の葉も落ちて杣人の

手斧の錆なる老木かな。

八 桶伏の御山の花は散らされて

我面影にのみぞ残れる。

第四九六

一 古の神の都に吹き捲る

黄金峰

嵐の浪の打ちかへしならん。

二 科戸邊の風吹きかへす朝開

浪逆まきて仇をや呑まん。

三 来て見れば山の諸木は緑すれど

浦悲しけれ宮居の跡は。

四 三千年の醜荒浪に漂ひて

現れまし、神の宮居こぼちぬ。

五 桶伏の山登り往く信徒の

心の空に時雨しにけり。

六 宮脇に潜める醜の曲神の

荒ぶがま、に任したまひぬ。

七 皇神の心は廣し和田の原

秘密の底は知るよしちなし。

八 桶伏の山に夜なく、只一人

祈る真人のありと知らずや。

第四九七

一 白妙の衣の袖に梅薫る

綾の高天に詣で來しより。

二 親族家族うち連れ立ちて神園の

教への花に酔ふぞ樂しき。

三 和衣の綾部に薰る白梅は

心の花の眼さましぬ。

四 昔見し白梅の木は老ひぬれき

花の色香はいと目出度し。

五 足曳の深山の奥に潜むとも

花は咲くなり鳥謠ふなり。

六 青垣を四方に繞らす山里に

清き清水の流れけるかな。

七 都路の塵に汚れし御靈をば

來りて滌け玉の井の水に。

八 山里に身は老ひぬれき靈魂は

神の都の花と董れる。

第四九八

一 神園の松に御靈を取りかけて

神去りましぬ教御祖は。

二 白梅の花に心を残しつゝ

露奥津城に眠たまひぬ。

三 木花の咲耶の姫の生れましゝ

黄金の峰は雲に聳わつ。

瑞御靈珍の教をうつそみの

世は木の花に永久に榮わん。

西へ行く思ひは誰人もあるものを

見捨て、入るな大空の月。

憐れみの心は誰も廣げれき

育くむ袖の狭けきぞ憂き。

限りなき恵の御手を差し伸べて

救はせたまふ瑞の大神。

八 頂に霜降り添ひて白雪の

心の空は清くなりぬる。

第四九九

一 五月蠅なす聲は激しくなりにけり

世の別れ路の近づきしならん。

二 曲神の荒む闇世もすみがまの

黒き煙に消ゆるたうとさ。

三 あ、神と唱ふる聲に夢醒めて

打ち出て見れば月は傾く。

四 嚴御靈教への光なかりせば

如何でかけなん月に心を。

五 苗代の水は乾きぬ天の河

放ちてみづの御霊たまひね。

六 梅散りて御園の桃は咲きにけり

薫り目出度き神のまにく。

七 春山に朝なく雉子の聲すなり

神の御教の若芽摘めみや。

八 月の夜に生育ちたる姫小松

葉末の露に玉ぞ照りぬる。

第五〇〇

一 池水にうつりて咲ける梅の花

手折るはみづの心なりけり。

二 我行かん後まで散らず待てよかし

薫り床しき神園の梅。

三 久方の御空に咲ける桃の花

手折らんよしも泣き暮しつ。

四 よしや身は山河遠く隔つとも

心に手折る神園の桃。

五 眞清水も霜にこほればひた曇る

昔にかへれみづの御靈に。

六 山櫻彼方此方に立ち交り

松の縁に眺望添へぬる。

七 嵐山花のまに／＼緑なくば

錦の峰と誰か稱へん。

八 風に散る花の姿を眺むれば

人の浮世の憂たくもあるかな。

第五〇一

一 散りて又再び花の咲く春を

待つよしもなく滅行くかな。

二 永久の花咲き匂ふ天津國の

春こそ永久の住家なりけり。

三 讚め稱へ見上ぐる花の足許に

散りて踏まるゝ山櫻かな。

四 九重に咲く山吹の果無けれ

散りたる後に實さへなければ。

五 世の中は往き來の道も見ぬまで

闇の帳に包まれにけり。

六 闇の戸を押しわけ昇る朝日子の

七 日の出の神を待ちあぐみつ。

東雲の空を眺めて神の子の

月松の代を焦れ慕ひつ。

八 露霜の置きて褪せたる白菊の

花はあやしく葉末に慄ふ。

(大正一二、五、一五、舊三、三〇、於教主殿、加藤明子録)

第六篇 聖地の花



第二十六章 桶

伏

山 (二六〇二)

第五〇二

一 澄み渡る玉の井の底を眺むれば

二 風に散り行く花の影見ゆ。

三 玉の井の鏡に映る月影は

四 瑞の靈か如意の寶珠か。

五 花の色を褪せ行く見れば知らぬ間に

六 春は暮れけり野はうつりけり。

七 夜を照らす月の恵みを白雲の

桶 伏 山

花と讚めつ、雪と稱へつ。

五

雪よりも花よりも尚清くして

御空に澄める月の大神。

第五〇三

一

夢とのみ仇に聞きてし時鳥

只一聲の懐しくなりぬ。

二

神園に建てる常磐の松見れば

花に心はうつらざりけり。

三

松見れば何時も緑の色清く

常磐の春の心地こそすれ。

四

神園の白梅清く散り果てぬ

實を結ぶなる魁として。

五

高山にかゝれる入重の横雲に

なきすて、行く山時鳥。

第五〇四

一

時鳥泣きつるあゝに家鶏の

聲さはやかに曉告ぐる。

二

曉の黄金の鳥は泣き初めぬ

桶伏山

五六七の御代の曙なるらん。

三 いや高く月は照れきも入重霞

中空しきる忌まはしさかな。

四 武藏野に聲悲しげに泣き渡る

山時鳥血を吐きつゝも。

五 泣き潤て今は聲なき時鳥

焦る、袖に五月雨ぞ降る。

第五〇五

一 夏の夜も寝ねあぐみたる老人の

耳を澄まして泣く時鳥かな。

二 寝る間も神の御前を慕ふ身の

夢の山路に時鳥泣く。

三 世を嘆き人を嘆きて時鳥

聲からしつゝ、雲井を翹る。

四 一聲の叫びは月か時鳥

何れにしても悲しかりけり。

五 時鳥泣かぬ山里なけれども

都大路に叫ぶ術なし。

第五〇六

- 一 荒鷲の御空をかける都路は
- 山時鳴泣く術もなし。
- 二 小夜更て山時鳥淋し氣に
- 泣きつる聲の耳に入らずや。
- 三 足曳の黄金の山に登り見れば
- こゝにも聞きぬ時鳥の聲。
- 四 桶伏の山の茂みに身を潜め
- 聲悲しげに泣く時鳥。
- 五 風に散る花桶の影見れば

來るべき世の偲ばるゝかな。

第五〇七

- 一 いと清き谷の流れも濁り來ぬ
- 降る五月雨のしげきがまゝに。
- 二 風荒み雨は頻りに降りそゞぎ
- 清き谷水濁してぞ行く。
- 三 今暫し時待てよかし谷の水
- やがては月の影映すらん。
- 四 大空に雲ふさがりて五月雨の

桶伏山

降り來る中に時鳥泣く。

五 小雲川立ち出で御袂する夜半の

川音更て曙近し。

第五〇八

一 大空を包み隠せし五月雨の

中に輝く月の影かな。

二 白妙の我衣手は時雨しぬ

雲井の空を思ひなやみて。

三 澄み昇る二日の月も秋の空

盈つる今宵を待ちつゝぞ經し。

四 久方の御空にすめる月影は

海の外まで鏡とぞ見る。

五 踏み迷ふ人を照らして秋の月

雲に乗りつゝ西に傾く。

第五〇九

一 大空の月も夜なく眺むれば

さまで珍づしと思はざりけり。

二 昔見し月の光も今日の月も

珍の姿は變らざりけり。

三 中空に雲のさやりのなかりせば

月の光はさやけからまし。

四 瑞御靈月の光を見るたびに

恥しくなりぬ魂の曇りの。

五 桶伏の山に入重雲棚曳きて

小雲の川に月はさやけし。

第五一〇

一 すむ月の瑞の光を包まん

高山の端に起る黒雲。

二 小雲川科戸の風に波立ちて

うつらふ月は千々に碎けつ。

三 入重雲に鎖されるます月影も

ほのかにさしぬ獄舎の窓に。

四 春の日の御空の月を仰ぎ見て

涙しにけり吐息つくぐ。

五 醜神に押籠められし身の上は

窓の月さへ仰ぐ由なし。

第五一

- 一 和田の原漕ぎ行く舟のしるべども  
なりて導く月の影かな。
- 二 小夜更けて山路に深く迷ふ身を  
照らして昇る夜半の月影。
- 三 白妙の袖に輝く月影は  
恵みの露の玉とこそ知る。
- 四 深山路の木の間を通して照る月の  
影こそ千々に碎けけるかな。
- 五 玉の身を千々に碎きて木下闇に

潜む千草を照らす月影。

(大正一二、一五、一五、舊三、三〇、北村隆光録)

第二十七章 玉の井 (二六〇二)

第五二二

- 一 醜草しうくさの生茂おひしほりたる野路のぢ行ゆけば  
おきろかさねぬ山犬やまいぬの聲こゑに。
- 二 皇神すめがみと俱ともにありせば獅子熊ししぐまの  
吠ほ猛たけるさな恵めぐみとぞ聞きく。
- 三 道みちのため荒野あらのを別わかけて進すすむ身に  
醜しうの曲靈まがひの如何いかでさやらむ。
- 四 たそがれて山路やまぢに迷まよふ旅人たびびとを

照てらして昇のぼる夜半よはの月影つきかげ

- 五 わざわひの茂しほき世よなれば惟神かんながら

御旨みひねにまつろう外ほかなかりけり。

第五二三

- 一 嬉うれしくも浮世うきよの雲くもをわけ上のぼる  
今日故郷けふふるさとの月つきを見みしかな。
- 二 天傳あまつたふ月つきの恵めぐみも深草ふかぐさの  
露野つゆのヶ原はらにも宿やどりたまひぬ。
- 三 春はるの日ひの花はなの別わかれを借せむより

玉の井



神の御前のわかれおしめよ。

四 秋深みやがて 風吹き荒む

冬來るらん備へせよかし。

五 備へとは身体包む衣ならず

いや暖かき心培へ。

第五一四

一 四尾の山の諸鳥聲牙わて

峰に残れる有明の月。

二 大庭に燃わ立つ珍の紅葉の

赤きは神の心なるらん。

三 秋山の紅葉の色いろくに

照り輝くも神の御心。

四 同じ山に照る紅葉もいろくに

艶を争ふ浮世なりけり。

五 皇神の領有きたまふうまし世は

梢の露も御榮わごぞなる。

第五一五

一 神園の松の木蔭に佇めば

玉の井

思ひがけなき梅が香ぞする。

二 大空に聳わて高き常磐木は

百度千度風に揉まれつ。

三 山の井の底に宿れる月影の

深き心を汲む人ぞなき。

四 空寒き冬の夕に三日月の

慄ふを見れば淋しかりけり。

五 大空に慄ふと見ゆる月影は

おのが眼の迷ひなりけり。

第五一六

一 大空に引き廻したる闇の幕を

もれて輝く星の数々。

二 立ち迷ふ入重棚雲の綻びゆ

覗き初めたりオリオンの星。

三 選まれし民は照日の下にあり

たゞ待ち暮す望月の影。

四 日出づる國の空より輝きの

雲にのりつゝ、臨む月影。

五 ヨルダンの水底深く照る月の

玉の井

影は浪間に碎けてぞ澄む。

第五一七

一 吹く風に峰の櫻は散り果て、

御空に獨り月は霞める。

二 花誘ふ嵐いたむか大空に

月は霞みて影麗なり。

三 蜩の聲は漸く細りけり

風 荒ぶ冬悲しみて。

四 山の端に恵の月は輝けり

麓の里は光さへ見ず。

五 村雲を蹴散らすごとく進み往く

御空の月の勇ましきかな。

第五一八

一 夜半の暗照らしてなほも翌晝の

御空に月は輝き渡る。

二 時雨ては晴れゆく後の大空に

冬の夜の月清く慄へる。

三 打ち慄ふ月の姿を眺むれば

常闇のよを歎つべらなり。

四 黒雲の天津日影も隠す世は

曇らざらめや玉の井の月。

五 玉の井の底に宿れる月影も

魂は御空に永久に照る。

第五一九

一 秋の野の木々の梢におく霜を

照らしてからす天津日の影。

二 秋の夜に月の光のなかりせば

野山の草木根より枯なん。

三 天津日を眺めて遊ぶ人はなし

花見雪見と共に月見る。

四 天地に恵の露を垂れたまふ

月弄ぶ人ぞ禮なき。

五 空冴わて氷るか見見る月影も

降らしたまひぬ恵の露を。

第五二〇

一 桶伏の山に皇神有明の

月こそ人の生命なりけり。

二 百千鳥聲さわがしくなりにけり

玉の井

三 曉あけつ近ちかき兆しるしなるらん。

三 雲霧くもぎりを拂はらふ高天たかまの山風やまかぜに

吹ふかれて散ちらん醜しこの木この葉はは。

四 丸山まるやまの袖そでの月影つきかげ小夜更よよがて

小雲こくもの川かはは包つまれにけり。

五 眞盛まきさかりの短ひだりき野邊のべの櫻さくら花はな

春はるの心こころを借そしむなるらん。

第五二一

一 散ちりて往ゆく花はなの心こころは知しらねども

二 美うつくむならん空そらの月見つきみて。

二 月毎つきごとに輝あかりく月つきに比くらぶれば

花はなの盛さかりも物ものの數かずかは。

三 野のも山やまも眞白ましろに染そし白雪しらゆきも

朝日あさひの影かげに消きゆる果敢はかなさ。

四 花紅はなみどり葉は春はると秋あきとの錦にしきさへ

月つきの眺ながめのながきにしかず。

五 神垣かみかきの柳やなぎの梢芽しほめ含めみけり

常世とこよの春はるの魁すゐとして。

(大正一二、五、一五、舊三、三〇、於教主殿、加藤明子録)

第二十八章 那

智の 瀧 (一六〇三)

第五三二

一 水晶魂を選りぬいて 身魂のあらため爲し給ふ  
 絶對絶命の世となりぬ この世は變る紫陽花の  
 早七度も近づきて 神の審判も目のあたり  
 驚き騒ぐ醜魂の 身の果こそは憐れなり  
 さは去りながら何人も 心の柱を立直し  
 誠の道に還りなば 救ひの神はよろこびて  
 平和の御國にやすくと 進ませたまふぞたふとけれ。

二

こゝろ改め大道に 向つて進む人々は  
 神の恵みに助けられ 常世の春に遊ぶべし  
 悪念晴れず疑ひの 強く神慮に反きなば  
 必ず懲戒來たるべし 皇大神の御言葉は

三

巖のごとく山の如く いや永久に動き無し。  
 人の表面は變ることも 易りがたきは靈魂なり  
 神の御言をかしこみて 天授の魂を良く研き  
 やがて來らん皇神の しばきの時の備へせよ  
 神は愛なり權威なり。

四

わが脚下に注意して

かならず過つことなかれ

源涸れて川下の

水汲み得べき道理なし

山野の本草もその通り

根本なければ幹もなく

花咲き匂ふ枝もなし

根本と幹と枝葉とは

同じ一木の身魂なり

根本を大切に守るべし。

五

三千世界の梅の花

一度に開く時は来ぬ

スメール山に良の

皇大神のあれまして

治めたまはる五六七の代

月日と俱に迫りけり

敬い畏み大道に

叶ひまつれよ諸人よ。

第五三三

一

金龍の池の面に照る月は

五六七の御代の鏡なるべし。

二

圓山の御空に望の月照りて

圓く治まる神の御代かな。

三

四方の海皆静かなる神の代は

望の夜の月波間にぞすむ。

四

千早振神代ながらの月影を

うつす金龍池の水の面。

五

相戀ふる衣の薫る夏の夜に

しづ心なく月は傾く。

第五二四

一

久方の天の戸開けて嚴御魂

下り給ひぬ桶伏の山に。

二

天の川竿をかざして瑞御靈

救ひの舟をひきて下りぬ。

三

夕ざれば桶伏山もかすむなり

空にいざよふ月おほろにして。

四

池の面の波にくださいし月見れば

神の恵の俣ばれにけり。

五

獸等の荒れ狂ひたる神園に

すまし顔なる月の影かな。

第五二五

一

太刀劍彈は何處と潜水の

底まで探る獸の愚かさ。



二 四尾山木の葉揺るぎて神の園に

あやしき風の吹き荒みけり。

三 蜘蛛の子を散らすが如く戦きて

果敢なく失せぬ醜の仇花。

四 小雲川底の月影つかまんと

くだり來れる山の上の猿。

五 頭搔き耻かき己が手をかきつ

神の御園を猿かきまわす。

第五二六

一 玉の井に映る木の實をむしらんと

悶々苦しむ高山の猿。

二 鬼火かと思へば淋し五月雨の

雨に息する螢なりけり。

三 頭には赤き冠をのせ乍ら

尻のみ光る螢虫かな。

四 暗夜にはかすかに光る螢虫も

月の出づれば影消れて行く。

五 草の上に露の命を保ちたる

螢は月の光怖ぢつ。

第五二七

- 一 夕されば勢のよき螢虫も  
旭の影に消れ失せて行く。
- 二 千早振る尊き聖き神の山に  
登りて驚く醜の曲津見。
- 三 如何にして此神山を穢さんど  
醜の魔神の心砕きつ。
- 四 今暫し時待てよかし圓山の  
空に輝く黄金の莖を。
- 五 龍神も時を得ざれば玉の井の

水底深く姿かくしつ。

第五二八

- 一 月となり龍神となりミカエルと  
なりて輝く時近つきぬ。
- 二 四尾の山に隠れし國武彦の  
嚴の光を待つぞ久しき。
- 三 大入洲清く圍れる池水は  
瑞の御靈の姿なりけり。
- 四 澄み渡るこの眞清水も夕立の

水呑みあきて濁る忌々しさ。

五 眞清水も又泥水も否ますに

のめぎうつらぬ金龍の池。

第五二九

一 月照れる夕べの御空静かにて

柳の梢に春は來にけり。

二 大前を戀ふる心のなかりせば

浮世の旅も淋しがるらん。

三 大道の司の前に口ごもりぬ

思ひの丈を述べんとすれら。

四 何事か思ひの丈を述べべしと

教の言葉に口は開けぬ。

五 海山のつもる思ひもしかすがに

言葉の露の慄ふのみなる。

第五三〇

一 千早振る神に親しみ愛すてふ

心ありせば言葉の花咲く。

二 神柱遠く敬ひ居る身には

言靈車押しあぐみつ。

親しみと愛の心を楯として

廣く言問へ教司に。

我思ふ心のたけの一節も

語りかねつ、神柱の前へ。

我袖の涙の露に月照りぬ

祖神の問はゞ如何に答へん。

第五三一

夕暮れて妹と登る圓山の

月を仰げば耻しきかな。

小雲川水の心を白波の

上漕ぎ渡る汚家の釣舟。

月も日も波間に浮ぶ小雲川

清きは神の心なるらん。

桶伏の山を映して小雲川

いや永久に流れけるかな。

小雲川たつ荒波に驚きて

淵を出でけり龍のおとし子。

(大正一二、五、一六、舊四、一、於教主殿、北村隆光録)

第二九章 大 八 洲 (二六〇四)

第五三二

- 一 宮柱太敷建てし其昔を  
    偲ぶは一人我のみならず。
- 二 丸山の姿はとみに變れども  
    御空の月はいよよさやけし。
- 三 新聞の記者の囁き腐鶏の  
    曉またで鳴きたつるかな。
- 四 丸山の宮は再び建ちぬべし

- 五 打ち碎きたる醜の哀れさ。  
    醜弓のひきて返らぬ過ちに  
    的射外せし鬼ぞはかなき。

第五三三

- 一 桶伏の山に入重雲棚曳きて  
    紫の空に月は輝く。
- 二 紫の御空を廣くしめながら  
    輝き渡る丸山の月。
- 三 本宮山木の葉のさやぎ静まりて

洗ふが如き夏の月照る。

四 礎の跡を照らして夏の月

惠の露の雨を濺ぎつ。

五 只さへに清けきものを丸山の

月に輝く礎の露。

第五三四

一 丸山の底津岩根に嚴かに

昔を語る珍の礎。

二 丸山の月にあこがれ登り見れば

露を三年の涙あふる。

三 月清し礎清し丸山の

木々の梢はいとゞ清けし。

四 金龍の池に浮かべる魚族も

醜の嵐を恐れざりけり。

五 西東南の北と醜神の

襲ひし昔ぞ夢となりぬる。

第五三五

一 梓弓春の丸山緑して

梢の露に月を宿しつ。

二 人の世は百度千度移ることも

月は昔の姿なりけり。

三 限りある人の命は草におく

露の乾ぬ間の朝顔の花。

四 丸山にかゝりし雲のあと晴れて

今はさやけき月を見るかな。

五 みちのくの月を見んきて来て見れば

聖地に劣りて濁れる心地す。

第五三六

一 照る月の光に變りなけれども

人の心の空はいろく。

二 丸山に啼き残したる杜鵑

浦悲しげに仇し野になく。

三 何人も御空の月はめづるものを

花に心を取られてや往く。

四 仇花の茂り合ひたる仇し野に

色香妙なる白梅はなし。

五 皇神の深き恵を白梅の

花手折らん三仇し野彷徨ふ。

第五三七

一 照る月の眞下に住めば我影の

いと小小さく見ねにけるかな。

二 月影の傾く時は我影の

いと長げく見ゆるものなり。

三 小夜衣かけはなれても赤心の

通ひし友のなつかしきかな。

四 有難さに落つる涙の玉の神諭は

我永久の生命なりけり。

五 空包む夜の帳もあきの空に

輝く月の影ぞ戀しき。

第五三八

一 木の花の神の命の永久に

鎮まり居ます富士の神山。

二 瑞御嶽嚴島姫永久に

竹生の島に鎮まりたまふ。

三 高熊の峰に現ます玉照彦の



光輝く時は來にけり。

四 黄金なす峰の麓に現はれし

玉照姫の御世となりぬる。

五 桶伏の山にひそめる杜鵑

五月の空を待ちつゝやへん。

第五三九

一 一箸の運びの間にも死の影は

人のまはりをつけ狙ひ居る。

二 もてなしのいと懇な晝食こそ

味も殊更美はしきかな。

三 花かざす乙女の玉手にくめる湯は

いと香ばしき薫り漂ふ。

四 日に月に清き心のます鏡

のぞくも嬉し金龍のうみ。

五 起き伏しの草の露にも輝きぬ

瑞の御霊の月の御影は。

第五四〇

一 大前に天のさかてを只一人

うつの山鳩下り來にけり。

二

大前の櫛にかけし十寸鏡は

清けき神の心なりけり。

三

曇りなき鏡の面を眺むれば

我心根の耻かしきかな。

四

丸山に昇る月影いと清く

ミロクの御代を守りますらん。

五

神代より清く流れし和知川の

水瀬に澄める秋の夜の月。

第五四一

一

巖窟をあけし鏡をたづねれば

御空に澄める月と答へん。

二

御劍も鏡も玉も瑞御靈

岩戸を開く寶なりけり。

三

神つ代の世の有様をたづねんと

月にこへぎも月は答へず。

四

地に降り草葉の露に身を寄せて

昔を語る月の大神。

五

櫛葉にたれたる瑞の白木綿は

神も心をかけてや見るらむ。

(大正一二、五、一六、舊四、一、於教主殿、加藤明子録)

第三章 高座山 (一六〇五)

第五四二

- 一 仰ぎ見る此世の月に比ぶれば  
靈國の月は光妙なり。
- 二 上り行く足跡見れば惜きかな  
眞白に積める雪の圓山。
- 三 谷水の流るゝまゝに我行衛  
定めおき度し神にたよりて。
- 四 跡たれて幾世経ぬらん水無月の

社の松も神さびてけり。

五 千早振る神代ながらの月影は

我玉の井の底に宿れる。

第五四三

一 天國の花をかざして大神の

御前を祀る天使等。

二 朝日照る桶伏山の神の丘に

光を添へぬ秋の夜の月。

三 朝日刺す月澄み渡る圓山の

臺は神の嚴の御社殿。

四 今の世も後の世も又皇神の

恵にたよる外なかりけり。

五 愛はしと皇大神もみなそこの

すめる心をみそなはすらん。

第五四四

一 萬代に御榮光あれと朝夕に

祈る心を神は愛づらん。

二 本宮山裾を流る、和知川の

高座山

水は此世のみそぎなるらん。

三 小雲川並木の松も老ひにけり

吾身も老ひぬ神のまに〜。

四 二十五年神に仕へて漸くに

靈國の様を悟り初けり。

五 二年や三年四年の宮仕へ

いかで悟らん神の經綸を。

第五四五

一 光をば和らけ塵に同はりて、

世人を守る月の大神。

二 寢て祈り起きて祈りぬ愚なる

吾身に幸の永久にあれと。

三 千早振る富士の高山雪清く

深きは神の心なりけり。

四 如意寶珠玉拾はんと千早振る

神の光に求めて行くかも。

五 玉銚の道を歩める身ながらも

人は難波のよしあし誹る。

第五四六

- 一 世の爲に祈る眞人ぞ尠けれ  
そこの心は我身の爲のみ。
- 二 世を祈る我眞心に詐りの  
あら尊けれ神のみぞ知る。
- 三 罪穢あら人神の安かれと  
朝な夕なに神前に祈る。
- 四 我植し常磐の松は繁りけり  
三つの柱の幹を揃へて。
- 五 幾千代も忘れざらまし我植し

常磐の松に心こめて。

第五四七

- 一 此松の榮ゆる如く救へ草の  
永久なれと祈りつゝ植ぬ。
- 二 死るとも此松ケ枝に魂かけて  
五六七の御代を守らんとぞ思ふ。
- 三 靈ちはふ神の大道を歩む身は  
世のうき事も樂しみと見る。
- 四 此道の堅磐常磐に動かざれと

高座山

石の玉垣仕へまつりぬ。

五

冴に渡る入雲小琴のすがかきを

神も愛でつゝ、聞き召すらん。

第五四八

一

松ヶ枝に櫻の花に降る雨も

同じ御神の恵なりけり。

二

紅の花も清けき白梅も

同じ恵の雨に咲くなり。

三

神垣の風にしられぬ法燈は

根底の國まで照らし行くなり。

四

消にやらぬ神の御前の燈火に

開き心を照らされて行く。

五

来て見れば思ひしよりも勝りけり

桶伏山の珍の聖地は。

第五四九

一

玉の井の水の面てに心とめて

輝きにけり三五の月。

二

皇神の大道を歩む心しあれば

高座山

迷ひの暗も安く晴れなん。

三 山の上の池の心は仇なれや

氷も水も名のみ残れる。

四 名ばかりの水なき池に如何にして

月の姿の映るべしやは。

五 月の水たへてし無くば草も木も

如何で芽含まん此地の上にて。

第五五〇

一 皇神の教の眞清水清ければ

流れくして世を洗ふらん。

二 玉の井の同じ清水を掬ぶ身は

瑞の御靈の永久の友。

三 三十年の嚴の御靈の御教に

まだ現はれぬ光見るかな。

四 薄雲におほはれ居たる月の光を

今も仰ぎぬ目無き司は。

五 薄雲の迹け去り行きし後の月の

光に照りて慄ひ戦く。



第五五

- 一 かりそめに説きおかれたる言の葉に  
眼をこめて迷ふ人あり。
- 二 さま／＼に説けども説き得ぬ言の葉を  
聞かずして聞く人は稀なり。
- 三 曇りたる人の心を照らさんと  
嚴と瑞との鏡かゞやく。
- 四 情知らぬ春の嵐も神の里の  
主ある花は避けて吹かなん。
- 五 救主再び下る世に會ひて

誠の神の教をぞ聞く。

(大正一二、五、一六、舊四、一、北村隆光録)

第三章 黄 金 閣 (二六〇六)

第五五二

- 一 常闇の夜の帳は降ろされて  
初めて慕ふ月の影かな。
- 二 足引の五十路の山を二つ越わて  
三つの神ます花園に進む。
- 三 一人行くも惜しくぞ思ふ花の山  
ふりかへりつゝ招く友垣。
- 四 曉を告ぐる御殿の太鼓の音に

長き眠りをさましつゝゆく。

- 五 人は皆深き暗路を渡り川

清き流れに主一人立つ。

第五五三

- 一 傾きし月に心の澄みぬれば  
仇に一夜も寝られざりけり。
- 二 紫の雲棚曳きて大空に  
傾く月を慕ひ見るかな。
- 三 大空に慄ひて澄める月影は

黄 金 閣

地の風を歎ち顔なる。

四 小夜更さよまたて山川やまがは草木くさき静しづかなり

只月ただつきのみぞ空そらに冴さねぬる。

五 わくらはに心こころの月つきの澄すみぬるは

悟さりに入るいるの初はめなりけり

第五五四

一 山やまの井いの底そこに沈しづむも大空おほそらに

著しるげき月つきも同おなじ光ひかりぞ。

二 白梅しらうめの花はなは匂におひていつしかに

疎こみし人ひとも尋たずね來くるかな。

三 神垣かみかきを後あとに見捨みすて、行いく鴈かりの

中なかにも残のこる一列ひとつらもあり。

四 白梅しらうめの匂におふも待まちたで行いく鴈かりの

心こころの空そらは淋しみしかるらん。

五 神垣かみかきの春はるもあさ野の若草わかしらに

かくれて雉き子こ鳴なき渡わたるかな。

第五五五

一 丸山まるやまの木々きぎの梢しげの呼よ子こ鳥とり

誰を招くらん聲も静けく。

神園の梅手折らんと来て見れば

早くも散りて實は結びけり。

白梅の外にかんばし友もなし

散りたる後の心淋しさ。

散るとてもまた来る春を松ヶ枝に

緑の色のすがくしけれ。

風の荒みし跡の丸山に

照る月影はいとも長閑けし。

第五五六

三五の月は御空を唯一人

我もの顔に澄み渡りける。

久方の天津日影も月影も

元津御神の光なりけり。

杜鵑五月の空に里なれて

夜の再るまで啼き渡るかな。

金龍の池のみぎはもさみだれて

菖蒲の花の紫に咲く。

阜神の恵もわけて大入洲

松の木の間まに迦陵頻伽からびんがの鳴なく。

第五五七

一 和田わだの原はら澄すみ渡わたりたる月影つきかげの

傾かたむく見みれば淋さびしかりけり。

二 金龍きんりゆうの池いけの氷こほりの解とけてより

水底みづそこ深こくうつる月影つきかげ。

三 空高そらたかく立たつ河霧かはぎりの隙間すきまより

漏もれ來くる月つきの光ひかり慕しのはし。

四 長ながき夜よも明あけて悔くやしく思おもふかな

月の光ひかりのあせて見みゆれば。

五 神垣かみかきの空そらを包つつみし黒雲くろくもを

すかして照てれる有明ありあけの月つき。

第五五八

一 月出つきいで、松まつの緑ろくは榮さかえけり

紅葉もみぢ散ちり敷しく風かぜのの後あとに。

二 吳竹くれたけの筧せきの水みづにおく露つゆも

月つきの光ひかりをうけて輝きらく。

三 富士ふじの根ねに積つむ白雪しろゆきのいと清きよく

永久に消わざる心ともがな。

四 富士の雪の永久に消わざる心もて

清く御前に仕へまつらん。

五 霜の褥月の枕を數重ね

神國のために道傳へ往く。

第五五九

一 山川に風のかけたる花の橋を

渡らんとする今の世の中。

二 光無き谷の底にも岩躑躅

月の恵の露に匂へる。

三 世の爲に建てし宮居を醜司

眞金の銚を打ちふり碎きぬ。

四 世のために盡すと云ひし醜司の

醜の限りを盡しけるかな。

五 ひたすらに世を安かれと祈るかな

朝な夕なに神の御前に。

第五六〇

一 神垣の松を心の誓ひにて

主が千歳を朝夕祈る。

二 千早振神代は知らず老松の

梢に澄める月はさやけし。

三 綿津海の真砂の数はかぞふとも

数へ切れぬは神の御恵。

四 白梅の花も常磐の色添ひて

入重神垣に匂ひけるかな。

五 世の人の心の闇や晴れぬらん

澄み渡りたる丸山の月に。

第五六一

一 大空の月も澄みけり池水も

澄み渡りたる神垣の庭。

二 御稔する小雲の川の小浪の

日数重ねて神に祈りつ。

三 皆人のやがて渡らん三瀬川

せき留むるよしも無き涙かな。

四 白妙の我衣手は濡れにけり

露と消々にし可憐兒のため。

五 草の葉におく白露のいつまでも

醜の嵐に散らぬものは。

(大正一二、五、一六、舊四、一、於教主殿、加藤明子録)

第三章 五六七 殿 (二六〇七)

第五六一

- 一 高山に雲湧き立ちて天津日の影もかすかに成りにけるかな。
- 二 東の峰をわけつゝ、昇り来る月の姿の大きく見わけり。
- 三 いつ迄も日は我上に輝かじやがて傾く夕暮の空。
- 四 大空の星の光を押しかくし



輝き渡る天津日の神。

五 天津日の光の西に沈みてゆ

星の真砂は輝き初めぬ。

第五六三

一 星影もまばらになりぬ秋の夜の

清けき月の昇りましてゆ。

二 半開の花も嵐にたゝかれて

もろく散り行く浮世なりけり。

三 現し世の恵の神のまさずあれば

人の命の如何であるべき。

四 限りなき玉の命の眞清水を

恵ませ玉ふ瑞の大神。

五 永久に朽す亡びぬ玉の緒の

命賜ひし元津祖神。

第五六四

一 鳩の棲む桶伏山の木の間より

夜は明けにけり霞晴れけり。

二 山々に數多泣けども時鳥

その諸聲は空音なりけり。

三 奥津城の山に咲きぬる女花郎

露の涙に打萎れつゝ。

四 奥津城の松の梢は緑して

常世の春を迎へ顔なる。

五 奥津城の紅葉の色は紅は

教御祖の心なるらん。

第五六五

一 玉の身をかくしまつりし奥津城を

醜の獸の穿つ御代かな。

二 奥津城は幾度もなく穢されぬ

深き經綸のおはすなるらん。

三 世にありて仇に攻められ死りては

又もや獸に呪はれ玉ひぬ。

四 鳥獸虫族までも救ひ行く

嚴の御靈は安くまさなん。

五 奥津城の御庭の廣く清けきは

教御祖の心なりけり。

第五六六

- 一 時鳥のみか諸鳥夜なくほろ・さすに
- 來りて教祖が奥津城守る。きた みをや おくつきまも
- 二 白雲の遠き國より尋ね來てしらくも くに
- 教祖が奥津城拜む信徒。みをや おくつきをま まのひと
- 三 おさへられ足に踏まれて水袋あし ふた まづ
- いや益々も固くなりぬる。また つか かな
- 四 瑞御靈中に充たせし水袋みづたまなか
- 押へよ踏めよ力限りに。おさ ふた よりかぎ
- 五 奥津城の御空を高く照月はおくつき みそら たか

露の涙を夜なく降らしぬ。つゆのなみだをよなくふりらしぬ

第五六七の一

- 一 諸々の去りにし教子は喜びてもろもろのさきにしみしきょうしはよろこびて
- 露おくつきの庭に遊びつ。つゆおくつきのにわにあそびつ
- 二 天王の平の森に入百萬てんわうのひらのもりに入ひゃくまふ
- 神集ひしてはかり玉ひぬ。かみつひしてはかりたまひぬ
- 三 大方の春の哀れは鶯のおほかたのはるのあはれはうぐひす
- 泣く音にまさるものなかりけり。なぐねにまさるものなかりけり
- 四 奥津城に來啼く鶯聲頃れておくつきにきたなぐうぐひすこゑか

また泣き渡る時鳥かな。

村雀露おくつきの塚の前に

い寄り集ひて太祝詞宣る。

五

第五六七の二

荒されし殿の御幕も神直日

國直靈主の深き神心。

奥津城を慕ひて詣る信徒の

心に悲しき五月雨の降る。

奥津城の空晴れ渡り日は照れぬ

三

音なき時雨に袖は濡れつゝ。

嬉しさこ悲しみの雲行き交ひて

心の空の月は曇りぬ。

奥つきの神は表に現はれて

開き玉はん五六七の御代を。

(大正一二、五、一六、舊四、一、於龍宮額、北村隆光録)

大正十四年十二月廿八日印刷  
大正十五年一月一日發行

不許  
複製

山河草木(丑の卷)奥付

定價 壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町大字本宮村小字本宮下  
三十二番地

編輯者 北村隆三

京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地

印刷者 大谷恭平

京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地

發行所 天聲社

(振替大阪六〇五三四)



終

